

参考資料 2
--------

## 第三次教育・文化ふくい創造会議（第1回会議） 議事録

□日時	平成20年11月25日（火）	12:30～14:30
□会場	福井県庁6階 大会議室	
□出席者	伊藤委員、大廻委員、佐野委員、瀬尾委員、祖田委員、竹川委員、長谷委員、西委員、広部委員（9名、五十音順）	
□事務局	伊藤教育庁企画幹、山内教育政策課長、持田文化課長、工藤文化財保護室長	

## 教育政策課長

本日は大変お忙しい中、第三次の「教育・文化ふくい創造会議」の第1回会議にお集まりいただき、ありがとうございます。

まず、開会に当たりまして、西川知事からご挨拶を申し上げます。

## 西川知事

今日のご多忙の中、第三次の教育・文化ふくい創造会議の第1回会議にご出席いただき、心からお礼申し上げます。

また、今回は新たに、県外から伊藤委員、西委員、後藤委員、丸山委員、また、県内から大廻委員、瀬尾委員、竹川委員、赤土委員、瀬川委員の9名の皆さんに加わっていただきました。感謝申し上げます。ご専門の立場から積極的な提案をいただきますようお願いいたします。また、引き続き委員をお願いする皆様にも、よろしくお願ひしたいと思います。

教育・文化創造会議は昨年8月の設置以来、主に教育問題を中心に議論を進め、これまで2度にわたる提言をいただいております。

教育については、全国学力・学習状況調査において福井県の子どもの学力が全国最上位の結果も出ており、全国各地から取材や視察が相次いでおります。福井県の地域の良さを活かした教育をさらに充実していけるよう努力をしておりますが、さらに現在は、福井県出身である白川静先生の「白川文字学」を活用した独自の漢字学習、また、今回は南部陽一郎先生がノーベル物理学賞を受賞されておりますけれども、すでにサイエンス教育等を福井県として積極的に進めているところであります。

こうした政策は、創造会議の提言を踏まえ、教育委員会が中心になって具体的政策を検討し、実行するものであります。福井の子どものための一生懸命な教育がさらに良くなるよう、私、知事の立場からも引き続き、積極的に支援していきたいと思っております。

さて、第三次会議は、この会議のもう一つの柱である文化の問題を中心に議論をお願いしなければなりません。私は、2期目の県政運営に当たりまして、県民の「暮らしの質」を向上したいという強い思いから、教育、文化を県政課題の筆頭に掲げ、政策を実行しております。

特に、この文化の政策については、「いつでも身近に福井の文化」という視点から、県民、特に次代を担う子どもたちが、第一級の芸術・文化を身近に体験できるよう、様々な政策を進めております。例えば、本格的な音楽専門ホールの県立音楽堂における園児・児童を対象にした「ちびっこコンサート」の開催や県立美術館の収蔵品を学校などで出張展示する「ふれあいミュージアム」など、子どもたちが本物の音楽や美術等に触れる機会を増す努力をしております。

また、文化財については、福井県には価値の高い文化財が数多くあることから、国の指定を受けられるよう文化財の保存・活用を進めるとともに、地域の祭りや民俗芸能を発表する「ふくいふるさと祭り」の開催などを通して、多くの県民に身近で、分かりやすいものになるよう創意工夫を行っております。

さらに、文化は、芸術文化や文化財の分野だけでなく、県民の暮らしに密着した食生活、住環境、働き方、福井の歴史や伝統に育まれた精神文化など、一般に「県民性」とか、国でありますと「国民性」という言葉に代表される分野を含んだ、幅広い概念であると思っております。

このような地域文化、あるいは広く大衆文化の分野についても、少子高齢社会の到来や国際化・情報化の進展といった社会変化の影響を強く受けることが予測されます。こうした社会変化の中で、行政としてどのような改善や対策を行っていけばいいかなどについて議論を進めてほしいと思います。

いろんなテーマを既に用意はしているかと思いますが、できれば文化の基本に立ち至って、我々がどのように文化の問題を考えたらいいいのかというベースを一度整えた上で、様々な問題に前向きに取り組んでいくことが大事でございますので、最初から具体論というよりも一度基本に立ち返って議論いただき、それから様々な具体論に移っていただく方がいいと、私は思っております。

最近、文化が「多様化」をしていると俗に言うのですが、意外に「パターン化」をしているのではないかと感じておまして、「面白味に欠ける」とか「住民の生活にあまり関係ない」といった問題があります。ですから、議論の幅を広げていただきたい。福井には良いところがあるはずですし、それを活かさなければならぬと思います。

福井の県民性は、粘り強いか、まじめとか、堅実にいろんなことをするとか、学力等にも反映していると思いますが、こういうものをベースにもう一回考えていただいて、様々な文化の問題に当たっていただくのが大事であります。これは文化のみならず観光等にも影響しますし、地元の皆さんが満足し、自信を持ったものがなければ、他人にも訴えていくことができません。どうか、こういう観点でお願いできればありがたいと思います。

簡単ではございますが、日頃思っておりますことを申し上げましてあいさつとします。どうぞよろしくお願いいたします。

#### 教育政策課長

それでは、今回、新たに9名の委員の皆様をお迎えいたしましたので、最初に委員の皆様方をお一人ずつ紹介させていただきます。

福井県立大学学長で創造会議の座長をお願いしております祖田委員、雑誌「選択」の編集顧問で元和光大学教授、元福井県立大学教授の伊藤委員、作家で福井ふるさと大使の西委員、社団法人福井県文化協議会会長の竹川委員、財団法人丸岡町文化振興事業団事務局長の大廻委員、続いて、座長から向かって左側でございますが、福井新聞社特別顧問で座長代理をお願いしております佐野委員、若狭ものづくり美学舎チーフ・ディレクターで若狭町文化振興アドバイザーの長谷委員、昨年秋まで福井県教育委員を務められた瀬尾委員、福井県教育長の広部委員でございます。

なお、県の特別文化顧問である小野光太郎さんには、アドバイザーとして今回の議論の過程で必要に応じて意見をお伺いしたいと考えております。また、文化は範囲が広いので、小野顧問以外にも、それぞれの分野の専門家の方々からも適宜助言をいただきながら、進めていきたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、ここからの議事進行は、祖田座長をお願いいたします。

#### 祖田座長

それでは、早速、議事に入りたいと思います。今回から新たに、「ふくい文化の振興」をテーマに検討を進めていくこととなります。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、事務局から「論点」および「現状と課題」を説明いただき、皆様方から意見をお伺いしたいと思います。時間の都合上、論点の説明を15分程度でお願いし、その後、意見交換の時間を90分程度持ちたいと思います。「論点1」から「論点3」まででございますが、本日は、論点1で30分、論点2で30分、論点3で30分程度の目安を持って、ご意見を伺いたいと思います。

では、事務局、よろしくお願いいたします。

#### 伊藤企画幹

それでは、お手元の資料に従い、論点ならびに各論点に関する本県の現状と課題等についてご説明します。「資料1」をご覧ください。なお、各論点に関連する細かなデータは、別途、「資料2」として提示させていただきましたので、適宜参照いただきたいと思いますと考えております。

## ＜ 資料1に基づき説明 ＞

**祖田座長**

では、今ほどの事務局の説明に基づき、意見交換を進めてまいりたいと思います。

これら3つの論点については、相互に関連する部分もございますので、必要に応じて他の論点とも関連付けながら意見をいただいても結構です。また、今ほど事務局から提示のあった論点以外にも、具体的に検討すべき視点や検討課題があれば、併せてご提示ください。

各委員には、これまでのご経験等を踏まえながら、忌憚のない意見、提案をいただければ幸いです。

では、「論点1」について、最初は着席順にお願いしたいと思います。まずは、伊藤委員からお願いします。

**伊藤委員**

先ほど文化の定義についてという話が出ましたが、これは非常に重要なことだと思います。文化と文明という対立、対称がありますが、私は、文化は小さい単位で可能となるというところに特徴があるんじゃないかと思います。文明というと、福井文明とか、丸岡文明とは言えないわけです。どうしても東洋文明とか、大きな話になってしまう。文化というものは発信源が小さくても、出力の非常に強い、広いところに影響を与えることのできるものではないか、というふうに普段考えています。

西川知事が、最近雑誌に「道州制幻想論」をお書きになっており、たいへん感服して拝読したのですが、今、福井だけの立場でありませぬけれども、地方行政を効率化する、経済化するために一つの自治体の単位を大きくする発想は当然かとも思うのですが、その時に、例えば福井が金沢を中心とする、北陸道か、北陸州か知りませぬけれども、一部になったとすると、私はもともとよそ者だったんですけれども、どうなのかなとたいへん心配である。

幸か不幸か、福井という県が嶺北・嶺南、あるいは越前・若狭という2つの特色ある地域からなっておりまして、複雑さも多少あるかとは思いますが、人口80万人とかなり小さなところに固まってまとまっている。また、その中に山と谷、川ですね。大野や坂井平野の文化とか、さらに小さな文化圏があって、そこからいろんな人が生まれているんですね。

もう一つ、教育の分野ですが、福井の教育というのは小さいがゆえに、いろいろ目配りがされている。私は家内と東京に住んでいるのですが、昨晚テレビで「福井は幼児死亡率が日本一低い」というニュースがありました。「やっぱり、早く帰らなければいけませんねえ」という話をしたところ。東京でも、「福井というのが、何か小さい県でどこにあるか分からないが、面白い県だぞ」と多くの人に印象を与えたのではないかと思います。

小さいがゆえの、あるいは弱小であるがゆえの勝者力というのがある。結論的には、3つの課題に関わるのですが、福井という地域の学だけではなくて、スポーツや学芸、演芸といった文化の種類というものをできるだけ多様にして、文化の単位をあまり大きくしないのが重要じゃないかと思います。こうした福井の文化の伝統が出来ますと、10年後、20年後に、みんなが注目するような特異の輝きを放つのではないかと思います。

**西委員**

芸術文化活動という中で、僕が生きている生活・状況が、今回皆さんとお話しする委員の中で、僕が一番そこで生活している、そこで作っている、そういう仕事している立場としていろいろ言わせていただきたい。

僕の考えとしては、今日を起点とすると過去と未来があると思うが、文化で今日まで残ってきたものというのは、勝ち組の文化だと思う。過去いろんなところでいろいろなものが、福井の中でも生まれているし全国でも生まれている、今日まで何年たっているか分からないが、残っているものは勝ち組、支持されているもの。今日で言えば、売れたものといえる。宗教でも、支持されたもの、それを信じるというものが宗教として残っているわけであって、仏像でも拝みたいと思われた仏像が残っている。マナーなどもすべてそうだと思います。

この、文化に歴史が付いてくるものをブランドという。今氾濫している言葉で言うとブラン

ドということになると思う。実は、ブランドの定義というのは、歴史のある文化ということ。その認識で行くと、担い手を作るためには、いま福井にある文化は勝ち組だと。勝ち組、負け組というのは余り好きではないが、子どもたちにやる気、興味を持たせるには、これは勝ち組で残ったものなのだよという見せ方をしないと手を出そうとはまず思わないと思います。手を出させるということが必要で、芸術の芸という字は、白川先生ではないけれども、植えるという漢字でもありますよね。だから、植えなくてはいけないと思います。子どもたちに、植えて育てなければいけないと思っています。そのために、勝っているのだということ輝いている形で見せる、表現して、手を出すようにしていく。

たとえば、若狭の塗り箸はここ近年非常に売れて、福井県の中でも小浜は勝ち組なのかもしれませんが、たまたま僕は、別の仕事で、今回、若狭塗り箸のプロデュースもすることになったのですが、その段階でいろいろ考えていたのですが、これは例なのですが、若狭塗り箸という文化が福井にあって、いま勝っているから表現するわけでもあるのですが、テレビを見ていて芸能人の95、6パーセントは箸をきちんと使えません。これは、日本にある文化のお箸というものを殺しているわけです。

今は、親に任せておいても仕方がないので、学校の1年生になった段階で給食があるわけですから、教師にも任せられなかったら、それが出来る作法の先生を呼ぶと。福井には小笠原家があって、小笠原流というのは作法の家ですから、箸使い、食事の食べ方、これも文化ですから、そこから箸に興味を持たせていくということもできるし、お箸という言葉はくちばしから生まれたとかいろいろな説もありますし、そういうことも教育で取り上げて、そういったことから興味を持ってもらって箸をデザインするという発想などをしていくと、文化も広がっていくと。そういうやり方は一つの方法としてあると思っています。

ひとまずは、この程度で。

## 竹川委員

先ほど伊藤先生もちょっとおっしゃいましたが、僕と同じような本、活字を見たり、テレビを見ていらっしやっているのかなと思いましたが、知事の書かれた時事通信でしょうか、最後に地方都市のことが書かれておりました、福井県の良さをアピールされておられる記事を拝読させていただきました。

確かに、こじんまりしている福井県でありますから、非常にこのこじんまりしているということをかかすかということが、一番大事な分野になってくるのではないかと思います。福井県があって、市があって、私たち田舎に行けば小さな町内があって地区があると。私の町内は6町しかない。200人くらいの地区ですね。だから極めてまとまりがいい。隣は何をする人ぞとかではなくて、誰かいないと「あの人はどうしたのだろうか」といった話になるくらい、興味・関心が極めて強い。そういった状態が、もう少し拡大すれば福井県になるのではないだろうか。

教育の良さもアピールされていたが、確かに、県の方針も少人数学級をやっていただいているその効果もあると思います。県名を上げて悪いんですが、うちの娘は奈良県に行っている。担任の先生に聞くと、「分からないことがあったら塾に行って聞いてきなさい」と、それで終わる。福井県はぜんぜん違う。個別指導や補習で遅くまで残ってやっている。それもやはり福井県の良さであります。

それは何故かという、小さい県で、ふるさとというものを極めて大事にしているのではないか。三世同居率が高いので、先ほど箸の使い方の話もあったが、三世がいると、おじいちゃんやおばあちゃんが教えますよね。そういう福井県の良さ、三世の良さ、ふるさとの良さを文化面でアピールしていく必要があるのではないか。

戦後60年、「紙よりも薄い義理人情」という言葉が現在当てはまるそうですが、先ほど忠臣蔵の話もありました、義理人情の世界であります。そういうものが、今失われつつある。そういうものを大事にするということが基礎・基本になると思う。

僕は俳句はよく知りませんが、松尾芭蕉は「不易と流行」ということをおっしゃいました。不易なるものをきちんと残していく、学校で言えば基礎・基本をしっかり教えていく。そういうものがベースになかったら駄目だと思います。流行が悪いわけではない。不易は、普遍なるもので、流行はその時代時代にあったものを併せていかないといい作品、価値は生まれにくいということだそう。根っこは、一つだということですから、流行が決して悪いわけではない、時代にマッ

チしながら、押さえるべきところ、不易なるものをきちんと押さえていくということが必要だろうと。

そういったことを私たちは繋いでいくということが基本ではなかろうかと思っております。先ほど文化のベースは何かということについて知事から質問がございましたので、そういったことを感じたので、お話をさせていただきました。

### 大廻委員

私は、今の言葉というものをとても大事にしたいと思えますし、言葉の中には魂がある、言霊というものがあると思います。

昨年から、言葉シンポジウムというものを伊丹と熊本、福井県坂井市など6つの市町村が一緒になって、伊丹市でやりました。そこで「言葉が持っている魂というのは何か」、「言葉が持っている県民性、市町村の違いはなんだろうか」という中で、東北というのが一つの例に挙げられました。東北の人は、結構ハツタリを言う人が多いのですね。物語にも非常にハツタリめいたものが多い、壮大なスケールのものが多いのです。

ところが、福井県になると物語が何か真面目になる。真面目すぎて何か面白くない。私は、地元の丸岡ではハツタリの大廻と言われている。市内では大いにハツタリをかましていますが、ハツタリと嘘つきというのはまるっきり違いまして、もう少し福井の文化を何とかしようという原点に立ち返ると、先ほどの知事の物語のお話ではありませんが、少し大げさな物語を皆で語りあう。その大げさな物語を何とかして実現して、夢のようなものかもしれないけれども、実現しようというところにヒントがあると思う。

すべての都道府県を回ってしゃべらせていただきました。そこでいろいろなものを学ばせていただいたささやかな経験で言うと、福井に一番欠けているものがこの遊びであり、笑いであるという気がします。

### 佐野委員

文化というと幅広くて、各論に入る前に文化の定義をどうとらえるかということについては非常に大事なことだと思うのですが、まず文化という言葉の奥行きを考えていくと、自然、風土、歴史、伝統、文化のような形で繋がっていくのではないかと。風土という言葉が、風と土でできているが、風というのはぶるぶると目に見えない、回っているという感じはしますね。土は土着のものですから、ここにあるものと。それが出会って風土と文化が形成されていくと、観念的に言えばそういう感じがする。それぞれの土地、土地で、インターナショナルなものを受けながらその土地の持ってきた歴史、自然、伝統と結びついて独自性があるのではないかとと思う。

そういう観点でとらえていくと、福井というところは、狭い小さな土地ですけれども、人口も少ないですが、非常に歴史的な遺産と申しますか、多様性がある県ではないか。先ほども話に出ているように、大きく分ければ若狭と越前、嶺南と嶺北がある。特殊性がある際立った地域が、結合して県を形成している。明治14年2月7日に福井県が誕生するわけですが、一回福井県という県がなくなったという。全国の都道府県の中で、なくなった県というのは福井県だけだといいます。石川県や滋賀県に入ったりしていたものが福井県になったということで、一番遅く県ができたところである。それほど、小さいけれどもある意味まとまりにくい県でもあるということだと思います。

というのはやはり、越前と若狭という文化圏が違う。若狭は関西圏だし、こちらは越の国という、その「合わい」というか「際」というか、福井県はそういう県だと思う。ということは、それだけ異質のものが結びついていきますから、それだけ活力あるものがいろいろ生み出される県ではないかなと思っている。その良さを生かしていく必要があるのではないかと。

自然で見ると、福井は南限北限がまず重なっていると、植生として重なっていると。南の植物も北の植物も福井には来ていると。植物の先生に言わせると、福井は非常にユニークな土地で、福井で調べれば大体全国のレベルが分かる。例えば、渡辺定路先生というのは福井県の植物誌を作った先生だが、どこにどの植物があるかというのを調べ上げた。それが全国の北海道から沖縄までの種が来ているとか、トンボなんかの種も北のものも南のものも来ているとか、何かそういう意味で「合わい」の面白さというものがあるのではないかと思っている。

言葉の話でいうと、国語辞典の付録にアクセント分布図がついている。それを見ると、なんと

福井県は5、6種類のアクセントが重なっている地域なのですね。関西圏は関西弁で一色だが、福井県は東北のような部分もあるし、これは個人的な感覚ですが、朝鮮半島のハングル語のようなアクセントもあるし、若狭は関西弁でしょう。大野は、美濃地方の言葉も入っている。また、熊本の特定地域と福井の言葉が似ているという、そういう分布図が付いていた。これだけ集中しているのは、全国でも福井だけです。あと、東北は東北で、各県が大体一色になっている。広域圏で同じアクセント。福井はこの狭い地域で日本全国のアクセントが入っていて、これなんかも非常に面白くて、こんなことを言うと誤解を招くかもしれないが、福井の人はアナウンサーになるのが難しいということです。NHKのアナウンサーなんかになっている方はほとんどいらっしやらないのではないかと。宇野重吉さんは福井のアクセントの良さを活かして、朗読などで際立った良さ、特異性を発揮されたのではないかと。だから、これまで培ってきたもの、続いてきたものの中から良さや特異性を検証して、見つけていく必要があると思う。

人物でも、白川静先生がある日突然出てきたわけではなくて、その前には福井で育って、橋本左内のことも子どもの頃から聞いている。それから、橘曙覧のことも子どもの頃から学んでいる。そういうものの集積の中で漢字の学問に進んでいくという感じですから、そういう意味でこれまでの個性が際立つというよりも、福井県全体の地域力、地域の文化力が、いろんな人材を生み出していくということだと思ふ。

ですから、一人の人間の能力というよりも、文化は全体の力で形成されるので、福井の個性、地域性というものをもう少し深く掘り下げて見ていく必要があるのではないかと考えています。

### 長谷委員

皆さんのお手元に、若狭町のパンフレットを封筒の中に入れて配布いただいている。若狭町環境芸術文化振興ビジョンというのを、まとめさせていただいてまして、ちょうど文化の時代を迎えていますので、この福井県の17市町のうちの一つとして大きくはない若狭町なのですね、町で去年から今年にかけて一生懸命、お粗末ですけど書き上げたものです。是非また、参考にしていただきたいと思うわけです。

文化の時代を迎える中で、若狭町教育委員長も2年間させてもらっていたが、観光とか産業とかいろいろなものを論じていくと、どうしても文化資産というものが問題となってきました。文化が相当重要なポイントを占めてくる。それで、教育委員会から町長部局に移しまして、福井県で初めてかもしれませんけれども、文化そのものの補助的執行ということで、文化そのものを首長部局に移しました。これからやっていくということ、これにすべて書かせていただきました。

僕自身は、若狭に住んでいますが、若狭高校を出て東京の美大に行って、それ以降いわゆる美術作家を40年続けてきました。その一方で、教員もしてきました。小学校4年、中学校4年、高校20年ほどになりますか、教員もやってきました。そのような経験の中で少しお話をさせていただきたい。

割と若狭高校では、高校生ときは絵が上手いと思って東京に出たのですが、正直言って相当コンプレックスに悩んだ。特に、大方浪人ばかりの中に現役で入ったのですが、入学して喫茶店なんかで話をしていると、皆がセザンヌやピカソやとかいう話をする。皆しゃべるのですが、僕は見ていないですね。僕は画集をみて勉強したり、たまには京都に行ったりして見てきたのですが、それでもあんまり見ていない。そのコンプレックスというのは大きくて、生徒の立場、担い手ということになると、いかに見せるか、聴かせるかということ。芸術については生で聞く、絵も一点しか在りませんから、それをいかに見るか、見せるかということがわりと重要なという気がします。これは、自分自身の体験で、そうあって欲しいと思います。

僕が高校生ときは県立美術館がまだなかったので、京都に良く出かけましたし、それから美大を受けたくても、福井県では大変苦しい状況ですね。だから、僕なんかは、大阪の市立美術研究所に土日になると行って勉強していた。なかなか福井県の中では受かりにくいし、そういう場所も少なかった。今でもそれほど恵まれていません。そのあたりが、担い手育成ということを考えると切実な問題になってくるのではないかと思います。

僕自身教員をしていましたし、高校の校長もしていましたが、正直申し上げて、高校で教員の定数80名ほどをいただきますと、週20時間を超えると書道でも美術でも先生を置こうと思いますが、どうしても校長としては英語とか数学とかの定数配置に気を使って、芸術の先生は置き

にくいですね。同じ定数をもらって、その定数の中で国、数、英など全部をそれぞれ何人確保するかということ、校長は学校経営上考えるわけですが、どうしても芸術という教科は残念ながら置きにくいんですよ。僕自身の芸術の教員でありながら、校長をしたときには置きにくかったですね。これをどうするかという、教員の問題はあると思います。

芸術三科の教員をどう揃えるか、おそらく今実質は分かりませんが、書道の先生は常勤の先生はそう多くはないと思う。非常勤の美術とか書道の先生は、授業だけは来るが放課後の部活動にはいないということになる。若手の育成という点では、実際は非常に苦しい。やはり高校のときに芸術文化活動がどれだけ盛んかというのがそのあとに大きく影響しますので、高校における文化芸術活動、芸術教科の充実というのを、教員の側からどう確保するかというのは非常に難しいとは思いますが、その問題が一点あります。

また、生徒の側から見ると、いかに見せるか聞かせるかという方策をやっていくかというのが非常に重要と思う。

特に「ふれあいミュージアム」ということで、去年県立美術館から若狭町がピカソなんかを借りてきた、そして版画を見せる、今年は浮世絵などを借りて見せている。子どもたちに見せようと思うとどうやって集めてくるか。要するに運搬する手立てが大変難しい。みんなに来てもらわないといけないが、本物は一点しかありませんから、あるところまで運搬することができない。

だから、県立美術館でも音楽堂でも、バスを若狭から音楽堂なんかに出してもらっているのですが、あれをいかに生徒たちに見やすくするような援助がどうしてもいるのですが、具体的なことにはあまり触れないということなので触れませんが、そのあたりはとても大事なかなと思います。

先日、この一週間ほど前も熊本に行ってきました。熊本県立美術館、熊本現代美術館などを見てきて、荒木さんの写真の熊本ララバイなどを見てきたが、どこへ行っても団体というのは20人くらいです。団体30人というのは福井県だけだと思う。30人いないと団体料金にならない。古いと思います。

それから、福井県内の小中学生から、福井県立美術館が入場料を取っている。今ほとんど生徒に対しては無料になってきている。そのあたりは何か生徒に対して援助していただけないかと思う。そういったことで、若手の育成ということを考えてもらいたいなど。教師の側と生徒の側というのが非常に重要なポイントかなと思っています。

## 瀬尾委員

私は、家で農業をやっております。文化活動というのは一切しておりません。唯一していることは、伝統囃子ですね、祭りで囃子の笛を吹いていると。それでも後継者の育成といいましか、僕たちの後釜をつくるのにたいへん苦勞をしている。県の教育委員になりまして、高文祭それから全文祭が2、3年ほど前になりますか、福井県でありました。そのとき初めて見せていただいて、高校生でもこれだけのことをやるのだということを実感しました。全文祭の時には、県内でこんな文化活動もやっているのかということを知りました。

例えば、敦賀で創作ダンスの教室を持ってやっているとか、そういうものは一般的には県民の皆さんも全然知らない。一県民としては、文化活動との接点というものがどこにもない。あるとすると、音楽堂とかでコンサートを見る、県民がそこまで出かけて行って初めて見る、体験すると素晴らしいものだということが分かるが、全然そういったところに行かなければ、全く出会わない世界ということを一県民として思う。いかに、県民のところへ行けるかどうかということに、文化活動が活発になるかどうかという一つの要素があるのではないかという気がしている。

もう一点、先月若狭町で「福井ふるさと祭り」が開かれました。若狭地区の人が見に来られていたが、そこで「初めて左義長囃子を見た」というおばあさんがいらっしゃいました。「こんなにも楽しい囃子だというのは知らなかった」と。そういうものがあることはテレビで見て知っていたが、現実には目の前で見てこんなにも楽しい囃子だということは初めて知ったということです。

もう一つ、同じ町内でも「六斎念仏」というものがあるが、それも初めて見たと。同じ町内であつても初めて見たという方がいらっしゃった。そういうような体験、テレビなんかでは見ているのだけれども、現物を傍で見たことはないという方がほとんどだと思う。それをどうにかすれば、もっと文化活動に関心を持てるのではないかと思います。

自分も、自分の町内で囃子の後継者をなんとかつくっていきたくて頑張って頑張っているが、少子高齢化でだんだん若者がいなくなっている。その上に、自分たちの囃子を伝えていきたいと考

えているが、嫌なんですよ、やはり煩わしさが出てくるのですよ。若者が少ない上に、その子に集中して期待をもってしまうと、なおさら嫌がってしまう。そここのところを、これからどうするか考えていかなければならないと思うが、まだその解決策はありません。

#### 祖田座長

一通りご意見を伺いましたが、今お互いに、あの方はこういうことをお思いになっているのかということを感じに思ったと思いますが、そういう中で改めて感じられたこととお話いただけましたと思いますが、いかがでしょうか。

#### 伊藤委員

ちょっと質問があります。第一次、第二次創造会議は教育がテーマだったということですが、その中で、今、長谷委員も触れられました習字の先生の問題ですね。先ほど事務局の方の説明でも白川文字学の習字教育ということがありましたが、第一次、第二次ではどう扱われていたのでしょうか。

福井県では、書写というのでしょうか、どういうふうに扱われて、その重要性についてはどう考えられていたのか、それから習字の先生、小学校の段階でどういうふうになっているのかということはお分かりいただけますでしょうか。

#### 伊藤企画幹

書道の教員の数については、今お調べします。

最初の御質問ですが、一次、二次の教育関係のところでは、教科ごとの議論というのは余りしていただいていない。といいますのは、福井県全体の子どもたちの教育をどうしていくのかということで、例えば教員の多忙化の解消策、全国的な理数教育、理数の学力低下についてどうしたらいいかなど、ある程度論点をまとめた状況で座長がリードしていただきながら議論をいただいています。

書道だけではなく、社会など個別の教科に入った議論は、この会議ではあまり役割ではなかったのかなと思います。

#### 瀬尾委員

芸術の先生の話なのですが、市町関係、つまり義務教育関係になりますと掛け持ちの先生が多いんですよ。同じ地域内で学校を掛け持ちして教えていただいている。ゆっくり教えている時間がないということです。そういった現状です。

#### 伊藤委員

それは、常勤の教員ではなくて非常勤ということですか。

#### 伊藤企画幹

瀬尾委員は、小学校の場合には教科専任の先生がほとんどいないので、本来の国語の先生や算数の先生が芸術関係も教えているということをおっしゃったのだと思います。

#### 長谷委員

高校の芸術は通常4科目ありますが、福井県では工芸は開講していないので、美術、書道、音楽の3科目になります。

芸術科目の教師は、授業の持ち時間が週当たり17、18時間といった一定時間を越えると1人配置できるのですが、それを満たさないような時間割になってくると校長としては定数がありますから専任配置は難しいのです。そうする場合にも、非常勤で授業はしっかりやっていただける。

ところが芸術は放課後にキーポイントがありまして、いわゆる放課後の部活動が美大に進学したい子どもにとっては、授業よりも大事な芸術活動となってくる。そういった場合に、常勤の先生がいるか、いないかというのは大きく影響してきます。

非常勤では、放課後の指導が出来ないのがやはり最大の問題になってきます。



### 西委員

何十年も前、私が福井の学校に通っていたときも同じでした。私は、書道塾に通っていた。今思うと塾に通わせてくれた親に感謝しなければならないと思う。

今でも、福井新聞では正月に書道大会をやっているのでしょうか。私は小学校1年からずっと塾に通っており、大賞を何年もいただいてきたのですが、今、字を書く商売をしていてラベル書きなどでやはり役に立っています。

学校の授業でも国語の先生等に教えていただいたが、経験から言うと、親の稼いでくれたお金で悪いなと思いつつも、身銭を切って学ぶことに違う感覚を僕は持っている。芸術文化の分野でプロになろうと思ったら、やはり身銭を切らないと身に付かないところがある。人間はわがままだから、例えばもらったものを大切にしないというのと同じで、子どもや若者が芸術文化に興味を示したり、ちょっとやってみようと思わせたりするには、与え方のちょっとした演出が大事になってくるのではないかと思います。プロの作家、芸術家になっての実感ですけれど。

### 広部委員

今、たまたま教育における文化という議論ですが、県の美術展が終わりまして、来年は60周年ということでいろいろ準備をされるわけですが、デザイナーの松山先生と話をすることがございました。

一つ大きな、これは県全体の悩みでもあるらしいのですが、美術展の応募1つを取ってみても、県内で芸術文化に携わる若手がだんだん少なくなっているという話です。そこを行政で何とかすべきではないかということです。

特に、学校で芸術文化を強化していくためには、指導者の育成が急務だとおっしゃっていました。

### 西委員

指導者は確かに大事だけれども、最初は指導者が決める話ではないわけですね。

絵を描くのをかっこいいと思ってやるのか、指導というのはテクニックを教えたりするものだと思うのですが、いろんなパターンがあるようにしたほうがいいなと思います。

まず指導者ありきではないと思う。子どもに魅力を感じさせることと、本物を見せることが非常に大事だと思う。

### 竹川委員

私の妻は音楽の教員をしているが、昔、琴と尺八の演奏を小学校5、6年生に聞かせたところ、非常に子どもが食いついてきたというのです。

つまり、音楽堂に行かなくても学校で身近に本物を体験させるための支援も重要だと思います。まさに「琴線」に触れ、それが大人になっても残っていくことになります。

### 西委員

みんな、本物を見たいと思っているんじゃないだろうか。子どもたちに一歩踏み出す気持ちをどのように起こさせるかが大事になってくる。そのためにも、出来るだけ小さい頃から本物に触れさせる必要がある。

### 祖田座長

伊藤委員からは、「福井県は小さくても美しい」というスモール・イズ・ビューティフルという話がありましたけれども、今の話は本物を身近に見せたいということがございましたね。

東京におられる委員も2、3人いらっしゃいますが、東京は大きくて何でもある。30分電車に乗れば見たいものが見られる。

### 西委員

東京でも、魅力のないものは見に行かない。要は踏み出す気持ちをどう出させるかだろう。本物の芸術文化というのは、福井でも神社など身近なところに転がっているわけですね。「ここに

はこういうものがあるんだ」ということをちゃんと教えれば、分かるわけです。

僕が小さい頃には、お兄ちゃんとか、近所の人たちとかがそういう話をしてくれた。家の前に十郷用水が流れていて、「それは千年前に掘られた川ですよ」とか。

最初の刷り込みが大きいと思いますよ。

### 長谷委員

若狭町では「わくわーく」（委員提出資料）を2年前から町民全戸に毎月配布している。そうすると行事に相当出かけてくるわけです。こういった情報発信も一方で大事だと思う。

県美展では、高校生対象の賞を初めて設けたが、20代、30代の若者の発表の場がやはりない。県都のこの辺に発表の場を増やしていくことが出来ないかと思います。見せて何ぼですから。

昔は県内にも画廊があって、こうした発表の場といった役割も担っていたのだが、今は画廊自体がなくなっている。

### 佐野委員

やはり若者に興味・関心を呼ぶような施設や機会を、きちんと地域や学校、大人が考えて提供していくべきなんじゃないか。

### 西委員

小さいときに画廊に行くという習慣ができれば。

### 伊藤委員

戦後の福井文化は、もちろんこの近くにお生まれになって白川文字学を確立された白川静先生が代表としてあげられますが、石川九楊先生という日本の書道の世界で私はトップにいる方だと思うのですが、そういう方も輩出するなど習字というものの伝統があったのではないかと思う。

私は16年前に福井に初めて来まして、福井県民はみんな字が上手だという印象を持っています。私は字がとても下手なので、劣等感を持ちました。いつだったか福井には書写の教育の土台があるという話を聞いたことがあります。文化というときに「福井の文字の文化」というものを1つ題材にしていけないかなと思うのですが、実際はどうなのでしょう。

### 佐野委員

書写教育について一言申し上げますと、戦後、アメリカの占領政策で漢字が制限されます。当用漢字で習う字数も、訓読み、音読みも制限されますね。当用漢字から常用漢字に少し広がりましたけれども、その時に書写教育も弾圧というか、制限されたんですよ。

その時に福井はものすごく燃えて、それに反発して、当時の教職員課長だった東村先生という方がいらっしやいまして、教育委員会で影響力を持っていて、文部省検定試験を受けないと高校の先生になれないという時代に、福井から代表して指導者育成を毎年出したんです。その時出てきたのが村寄鴨畦（おうけい）先生や亡くなられた土田帆山（はんざん）先生、今東京で活躍されている稲村雲洞（うんどう）さんである。その方々の話を聞きますと、当時、夜行列車で指導者のところで習って帰ってくるような、情熱を持ってやっていたということです。

それが土台になって、若越書道会という教育書道ができて、今日の福井県の書初め大会につながってくるんですね。それが、7万点、8万点集まるわけですよ。今でも全小学校から高校までを含めて、児童・生徒のほとんどが参加しているわけです。もう70回を越えていますね。昭和12、3年から続いています。最初は、陸軍の演習が昭和8年にあったときに、天皇陛下にお見せするためにやったんですね。それを契機にして、戦前からの伝統を受け継いでいるわけです。

言葉というのは、「音」と「形」と「意味」がある。それが言葉の原点ですよ。形の部分が美的表現になって書写という伝統でつながっている。そして言葉をつなげば文学などいろんなところになっていくわけで、言葉を大事にするという視点から言えば、書写教育の指導者を増やしていくことなどを考えていくべきだろうと思います。

### 西委員

福井で書道が盛んなのは、福井って冠婚葬祭に一生懸命ですよ。のし袋を書くことが多いからではないだろうかと思う。そうすると見栄を張りたいということもあって、きれいに書きたいということもあるかもしれない。

### 大廻委員

県内の大学生、特に福井県出身の学生は皆まじめなんです。確かにまじめというのは、実は「美」の本来なんです。福井ではまじめというものが邪魔をして、一つの枠に囚われてしまっているんですね。それが行政のせいなのか、家庭のせいなのか、個人のせいなのかは分かりませんが。

今後の方向付けとしては、24時間夜でも使え、若者がアートできる、芝居ができる、音楽ができる場というか「遊びの空間」が必要だと思う。福井県には、物理的にも、精神的にもそういった空間がないような気がする。

それを学生に聞くと「ほしい」という、非常に強い要求として出てくるので、今坂井市としては新年度に向けて準備をしているところである。坂井市だけでなく、福井県全体でそうした遊びの空間、犯罪につながらなければ何をしてもいいという空間、もちろん一定のルールは必要だけれども、そうしたルールの下での遊びの空間づくりを進めていってほしい。

福井の場合は、枠づくりの範囲が少し狭いような気がするんですね。もう少し枠を広げてやるだけで、十分変わってくるような気がします。それで、先ほどの話にもあったような、美術館を無料にするとか、団体の枠を30人から20人にするとかちょっと工夫すれば、福井の文化というもの随分変わってくると思うんですが。

### 祖田座長

ありがとうございました。

こういった大きな枠の話が続けていきたいと思うのですが。はい、どうぞ。

### 長谷委員

美術、書道、音楽について、福井県独自の歴史があるはずだと思うんです。それが、各委員が言うように現在の福井県の特徴につながっているんだと思う。

次回の会議で結構なので、一度事務局で調べていただいて、提示してほしいと思います。

### 祖田座長

では、時間の問題もございますので、「論点2」についてご協議いただきたいと思います。小休止を5分程度持った後に、ご自由に意見を伺いたいと思います。

《 小 休 憩 》

### 祖田座長

では、再開します。「論点2」について意見を伺いたいと思います。

### 西委員

文化財の活用という問題については、福井に生まれ育っても知らないものがいっぱいある。とにかく私から県に頼みたいのは、福井の文化財の情報をもっとたくさん教えてほしいということだ。そういう活動をしていただければ、ネタになるものは作家としてどんどん使います。どの作家も同じで、いろんな情報が知りたいんです。

いつも県からいろんな資料を送ってもらっているんですけども、もうちょっと面白く見せるという問題はあるんですけども、いくらでも発信していきたいと思っているのに、そういった情報がまったくと言っていいほど入ってこないんです。

私が、全国紙の中で福井のいいものを発信していけば、県民も自分の県や地域に誇りを持つようになると思うので、県の仕事としてはそういうものがあると思います。

#### 大廻委員

福井の物語はたくさんあるが、聞いてもなかなか教えてくれないのが現状だろう。しかしながら、役所と専門家では捉え方が違うので。

#### 長谷委員

現代に生きる者へのメッセージを伝えないと、価値が伝わらないのは事実だと思うのです。現代の視点から切る、そして、現代によみがえらすことが重要である。

そうすると、まだまだ現地の調査をしないといけない。地元の若狭町には、平安時代後期の仏像があるし、天徳寺の庭園などいいものたくさん残っている。

#### 西委員

今は、お金の価値に例えないと価値を語れない人が多すぎる。

#### 大廻委員

この世界は、いろいろ規制が多すぎる。私は、昔、子どもたち一人ひとりを個別に順番に呼んで本物の刀を持たせてみたことがある。本物の刀の重さを実感してもらいたかったからだ。海外では実際に触らせるところも多い。

#### 伊藤委員

県では文化財をデータベース化しているのですか。それはどういったレベルまでなのでしょうか。

#### 文化財保護室長

市町の指定物件までをホームページで紹介しようと順次準備を進めています。

#### 長谷委員

国における文化的景観などは新しい概念である。昔はなかったように記憶している。こういった庭や景観などは、環境と結び付けていかないと指定はなかなか難しいのではないかと。

#### 西委員

こうした考え方は、西欧では進んでいる。一乗谷朝倉氏遺跡は、ラブホテルの看板が周辺にあるようでは問題だ。条例等で良い景観を守っていくべきだ。

朝倉氏遺跡は、文化が生きていない。地域のおじいさん等が昔の服装をしながら、朝倉染などを売るといった演出が必要だろう。そうすれば、ちゃんと観光客もスティするだろうし。行政主導ではなかなか難しい。

#### 長谷委員

今、宿場が伸びている。熊川宿なんかもお客さんで相当賑わっている。

「見（魅）せる」ということでは、例えば、県の歴史博物館を思い切って朝倉に持って行って、遺跡のメッカにするといったことも考えられるのでは。

#### 祖田座長

では、ほとんど時間が残っておりませんが、最後の「論点3」についてご協議いただきたいと思います。自由にご意見を伺いたいと思いますので、ご意見のある方はお願いします。

#### 伊藤委員

とにかく「日本一」が多いのが福井県の特徴だと思います。お金持ちで、使い方もうまいのかなど。この県の負債はどれくらいあるのですか。県のGDPの2倍くらいあるのですか。

また、福井は死に方といいますか、生き方のモデルになり得る県だと思います。そういったところをどう考えていくかということだと思います。

## 西委員

私、西ゆうじの書き物を1週間待ち遠しいと言ってくれる読書が結構いる。「あんどーなつ」は、別になくてもいいものだけれども、あることによって元気の源となる。そういう意味で生きている今の文化というのは必要だと思うんですね。

300円の雑誌を購入する人は、ありがたいことに300円のコーヒーを止めてでも買ってくれるんです。私の書いている雑誌ビッグ・コミック・オリジナルは、「雑誌が売れない」と言われている中で100万部売れている。それは、文化の力だと思うんです。

## 長谷委員

文化には、子どもの文化もある。童話や絵本という、それから子ども自身が生み出す詩などもあるわけです。

また、障害者の文化というものも「アウトサイダーアート」という形でアメリカなどでは、私たちと同じ扱いになっている。そういう時代になってきているので、子ども文化の視点をもっと細かく論じていくことが必要かなと思います。

## 祖田座長

本来ならば、さらにご意見等を伺っていきたいところですが、時間の都合もございまして、本日の議事についてはここで終了させていただきたいと思います。

なお、これまでの会議でもお願いしたところですが、委員の皆様方には、今回のテーマに関するご意見、ご提案を是非とも書面にて提出いただきたいと思います。前回、前々回も、書面でいただくことによって、議論が相当深まったということもございましたので、お忙しい中恐縮ですが、よろしくをお願いします。では、進行を事務局にお返しします。

## 教育政策課長

貴重なご意見をありがとうございました。

今ほど、祖田座長から、ご意見・ご提案を書面にてご提出いただく旨のご提案がありました。別途、事務局の方から文書でお願いしたいと考えております。

また、本日までに皆様方の2月上旬までのご都合をお知らせいただくようお願いしておりました。今後の会議日程につきましては、できるだけ早くお知らせしたいと考えております。

第2回会議では、本日、委員の皆様からいただいたご意見や、今後、書面にて提出いただくご提案を整理した上で、さらに自由なご意見をいただきながら進めていきたいと考えております。

なお、本日の議事録につきましては、事務局で整理したものを、教育政策課のホームページに掲載したいと考えておりますので、よろしく願いいたします。

それでは、第1回会議はこれで閉会とさせていただきます。本日は、お忙しい中、どうもありがとうございました。

以 上